

## 平野智洋（女子美術大学）「後期ビザンツ行政史小考—15 世紀ペロポニソス半島に於けるケファリ制度の諸問題」

後期ビザンツ帝国地方行政は、一般に行政官ケファリ(κεφαλή)と、それに対応する行政単位カテパニキオン(κατεπανίκιον)を基本制度に持つものと考えられている。これはアソス(アトス)山諸修道院が収蔵する文書史料をもとに、主としてマケドニア地方についてセオハリディス(G.I. Theocharidis, 1954)が行った地誌的研究などをもとに、マクシモヴィチ(Lj. Maksimović, 1988)が帝国行政について一般化したものである。

かつてハイゼンベルク(A. Heisenberg, 1920)ら若干の研究者はケファリに対応する行政単位として同一語源のケファラティキオン(κεφαλατίκιον)を想定したが、この学説には同時代史料による直接的証言が欠けているという問題点があった。マクシモヴィチはこの解釈を退け、ケファラティキオンについてはケファリの職権(地位・権限・職務)を意味するものであるとの解釈を提示した。一方でカテパニキオンも、その史料証言の殆どがマケドニア地方に関するものに限定されているという点から、帝国全体に及ぶ行政制度であるとの確証を得られていない。特に、ペロポニソス半島(モレアス専制公領)は衰退する帝国の中で例外的な発展と文化的繁栄を示しており、行政制度の整備はその発展を少なからず後押ししたと思われるが、その具体像は未だに明確なものとは言えない。

本報告ではこうした状況を鑑み、マクシモヴィチが同時代性に欠けるとして退けたニキタス・ホニアティス(Νικήτας Χωιιάτης)著作の口語版で行政単位を示す語として用いられ、史料成立当時(14 世紀)の行政用語として比較的認知されていたものと思われるケファラティキオンの再解釈を試みる。これまで行政史史料としてはあまり顧みられる事の無かったゲオルギオス・スフランヅィス(Γεώργιος Σφραντζής)『(小)年代記』など若干の口語記述史料、そして同時代の文書史料から、主としてペロポニソス半島地域に関して行政単位としてのケファラティキオンの使用例を抽出する試みを行う。続いて同様にペロポニソスを実例にとり、上記の史料叙述に加え、前後の時代(ラテン支配、トルコ支配)に於ける行政制度とも対比する意味で、ステファノー・マグノ(Stefano Magno)の要塞一覧表(1467 年)をはじめとするヴェネツィア史料などにも検証を広げ、ケファリの管轄区域や分布などについて地理的な確定の試みを行う。これら史料が示すペロポニソスの行政単位はいずれも殆どがマケドニアのカテパニキオンと比べて著しく小規模である。その主たる理由は、ペロポニソス半島全土の帝国への併合が極めてゆっくりとした過程の中にあつたという対外状況に拠るところが大きいと思われるが、再度スフランヅィス等の叙述に踏み込んで当時の行政官任命等、国内状況からの考察を併せて行う。